



第55号

平成16年(2004)

4月15日発行

(年4回発行)

猫養会のこれから

青木秀樹

「連句協会会報」一三六号に二村文人氏による「東明雅先生追慕」が掲載された。その中で、『井原西鶴集二』（小学館）の月報に書かれた日本近世文学学会会長であった守随憲治氏の「暉峻君と東君と」という一文が紹介されている。守随氏は「君の様に自重して学究経験を貯えた人、しかもよい年配の人、又物に動じない人、そういう人物を、捨てて置かないのが、今の東京の気風である（中略）本書の出来上がりによって、暉峻君とは別な、その無い味が味わえると思つて楽しいのだ」と記している。マスコミ等で華やかに活動していた暉峻康隆氏と比べて、いささか地味に映る明雅先生だが、その全集で『好色五人女』『好色一代女』の現代語訳に挑戦しておられたのだ。その後の芭蕉俳諧の研究への

転進といい、新しいことへの挑戦が明雅先生の真骨頂である。

談林派の俳諧から浮世草子作者に進んだ井原西鶴の作品は、雅語俗語を縦横に駆使した文体で、性欲・物欲に支配される人間をいきいきと描いている。後に、連句を「世態人情諷交詩」と規定された明雅先生の原点が西鶴にあることは明らかである。

暉峻氏と明雅先生はともに連句協会顧問を務められ、連句でも交流があった。朝日カルチャーセンターの連句講座の開設の件は、センターから要請された暉峻氏が「連句なら東明雅さんだ」といつて先生を紹介してくれた、というエピソードを郁子夫人から伺った。

猫養会は東明雅先生が主宰して結成された連句結社であり、先生が理論と実作の指導者であった。現在の猫養会は先生の教えを基本として連句実作に励んでいる集団である。明雅先生は自分が指導する蕉風の伝統を引き継ぐ連句が、連句文芸の復興に大きな役割を果たすことを期待し、実践してこられた。私達の使命は、「明雅連句」の一層の普及・発展を図ることではなからうか。それが連句に情熱を注いでこられた明雅先生の遺志にかなう事である。もとより、連句は文芸の一種であり、創作活動にはルールがある。連句の式目はだれでも覚えることが出来る。しかし、式目を知っているだけではよい作品はできない。創作活動には個々人の持っている資質が大

きく関わってくる。詩的発想力、句の解釈力などだけでなく、人生経験や好奇心のあり方などに個人に属するさまざまな要件が連句の創作に関わってくる。連句は多様な個性が集って創作されるものである。ベテランはベテランなりに、初心者も初心者なりに創作が楽しめるのも連句の特徴である。幸い猫養会には先輩が後輩を指導するよき伝統があるが、「これはいけない、あれはいけない」という制限が先行するような指導は好ましくない。連衆の発想を豊かにする指導をお願いしたい。

まして、「猫養会式目の整理」（猫養通信第二十一号・平成七年十月）に示された式目に、自己流の禁止事項を追加するような指導がないように願いたい。それよりも、連句一巻の作品性を高めるために、式目個々の簡条がなぜあるのか、どういう意味をもっているのか、の理解をすすめることで、式目全体の浸透向上を心がけていただきたい。さらに、式目は型である。型のよさを極めつくして後、よき型破りを生むこともできよう。しかし、型のよさを極めずして型破りに走ることも明雅先生の教えではない。猫養会式目による連句のよさを極める過程を踏みつつ会員が連句創作を楽しみ、その楽しさを通じて明雅先生の教えを広めて行けるようにしたい。

新しい会員をあたたく迎え入れ、ともに楽しみながら研鑽し、成長して行く組織でありたいと思う。

俳諧研究の現在

千野浩一

中学や高校時代に古典が大嫌いだった人でも、『去来抄』という書名ぐらいは聞いたことがあるだろう。それほど有名な俳論書である『去来抄』だが、芭蕉や去来が生きていた当時から有名だったわけではない。本稿では、『去来抄』が俳論中の「カノン (canon 正典)」として位置づけられてゆく過程を概観しながら、カノンとはならなかったその他の俳論書に、少しでも光を当てたいと思う。

カノンなどというと、いささか手垢がついた感がなきにしもあらずであるが、たとえば連句の式目作法は、語義的にはまさしくカノン (規範) そのものであるし、あるいは、俳句よりはるかに古典との繋がりが深い連句においては、芭蕉の一座した連句は言うまでもなく、伊勢派なら涼菟・神風館の俳人・乙由・北枝・希因・蘭更、無名庵系なら野坡・霞遊、美濃派獅子門なら支考・廬元坊・五竹坊らの古典俳諧に倣うようなことも、時にはあるかもしれない。現代連句の立場から古典俳諧を振り返ってみようとする場合、どのような古典作品が、どのような理由から正典化されたのかを予め知っておけば、古典の見え方はまた違ったものになるかと思う。

カノンとは、ハルオ・シラネ、鈴木登美共編の『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学——』(新曜社)が火付け役とな

って、数年前から文学研究の場で頻繁に用いられるようになった言葉・概念で、(正典・古典として選別されたテクスト群)という程度の意味。著者自身の説明を引いておく。

「重要な古典と見なされているテクストも、自然発生的に価値ある『古典』となったのではない。そこには、テクストの創造に加えて、テクストの価値の創造、流通、再生産、再編成といった、絶えざる言説組織化のプロセスが働いている。そして、このプロセスはきわめて政治的な性質を帯びている。総説で詳しく述べるように、本書では、この歴史的な過程を探求するために、テクストの選別(認知と排除)、聖別、規範化を意味し、闘争と変化を含意する「カノン」あるいはカノン形成という概念を導入する」(はじめに)より。

俳諧では、都市俳諧の浅薄さ・難解さ、地方俳諧の平板さへの反省から、芭蕉の五十回忌頃から始まった蕉風復興運動において、芭蕉が次第に神格化され、その作品も正典と仰がれるようになった。明治期に、正岡子規らが蕪村を見出したのも、俳諧におけるカノン形成の一典型と言えよう。このようにして、『去来抄』もまた、それが芭蕉の言説を他のどの俳論書よりも忠実に伝えているであろうという理由から、俳論におけるカノンに祭り上げられた。『源氏物語』や『徒然草』ならば、作者が誰であるかということが正典化の過程にほとんど関わってこないのに対し、『去来抄』は、

芭蕉の言葉を伝えるからこそ、カノンとなりえたのである。両者のカノン形成のプロセスは全く異なっている。

さて、連句を巻く上で、あまり拘るべきではないにせよ避けて通れないのが、式目作法である。この式目作法、連句の「規範」であるという点で確かにカノンであるのだが、実作者や研究者の間での評価は、『去来抄』とは反対に、どちらかというと等閑視される傾向にある。因襲的・非文学的であるというのがその理由であるようだが、『去来抄』もまた、因襲的な部分を多く残した式目作法としての性格を有することを、私たちはともすれば忘れがちになる。式目作法書と、『去来抄』『旅寝論』『三冊子』等の有名な俳論書との間に、明確な境界線はない。基本的に、一冊の俳論書が、本質論・式目作法・季寄せ・俳諧史論などさまざまな性格を兼備するというのが、俳論書のごく自然な姿である。

このような江戸時代の俳論書が、現在どのくらい残っているのか、その概数すら把握するのは困難である。式目作法論の分野では、東明雅先生が第一人者であり、『連句辞典』(東京堂出版)ご執筆の先生方もまたよくご存じであろうから迂闊なことは言えないけれど、比較的有名な俳論書については、ある程度まで整理されていて、岩波書店『国書総目録』に載るレベルのもので数百から千といったところか。伝書は、『国書総目録』未載のものがい

くらでもあって、筆者ですら数冊は持っているくらいであるから、個人蔵の秘伝書やその写し、あるいは写しの写しなどという次元の俳論書をカウントしてゆけば、おそらく数千点が残っているのではないかと思う。もちろん、その大半は内容の重複が甚だしく、さらに、そのまた何割かは書名が異なっている。同じ本として整理されるべきものである。把握しきれないくらい大量の本が、あちこちに分散しているという状況である。

繰り返しになるが、『去来抄』のみをこのような俳論書の例外として扱うべきではない。去来没後、本書はすぐには公刊されず、宝暦五年（一七五五）の素丸編『教訓百首』『去来先生確論』および同十二年の蓼太編『俳諧無門関』に、一部が抄出されるに留まっていた。『去来抄』が広く読まれるようになったのは、その十二年後、安永四年に尾張の暁台によって『去来抄』として出版されてからのことである。つまり、芭蕉没後約八十年の間、『去来抄』は事実上人々の目から隠されていたに等しい。去来にこれを秘匿しようという意図はなかつただろうが、実態としては公刊までは秘伝書と呼んで差し支えない状況にあった。

芭蕉研究の場では、芭蕉に仮託した書を「偽書」と呼ぶのが通例となっている。一方、芭蕉研究を専門としない立場から見れば、「偽書」という言葉の響きは、いかにも芭蕉の言説の正典化を象徴しているように感じられる。

芭蕉研究にとって有益であるか否かというところが、資料の価値を左右しすぎているように思われるのである。

『去来抄』ですら、これを偽書とする説が唱えられることがあった。暁台による『去来抄』出版とほぼ同時に、『花実集』という俳論書が出版されたが、本書に収める俳話の多くは『去来抄』に一致し、「去来曰」とある部分を「其角曰」に改竄している。一見しただけでは、どちらがオリジナルで、どちらがコピーであるのか分からない。そのため、昭和の初め頃、『花実集』をオリジナルとする論文が発表されて、一時期学界で大きな問題となった。後に、『花実集』が偽書であることが明らかにされてからは、本書はほとんど顧だにされなくなる。

確かに、『花実集』の記述には偽りがある。しかし、本書の価値を、単に倫理的観点から評価するのは適当ではない。大まかな傾向を言えば、俳論書というのは、たとえば師から弟子へ秘伝が授けられる際の金品の授受や、俳系の正統性の誇示等を目的として執筆される場合が多く、伝の詐称、誤写もしくは意図的な歪曲による誤伝、他見を許さない閉鎖的性格などの弊がしばしば指摘される。俳論書が公刊される場合も、例外的なものを除けばほぼ同様である。その最たるものが、享保二十一年（一七三六）刊の『二十五箇条』。芭蕉が去来に伝授したとの奥書を備えるが、現在では芭蕉に仮託した支考の作と考えられている。

本書ほどに有名な俳論書は、さすがに、偽書であるがゆえに無価値、などと断ぜられることは少ないが、支考の不人気と相俟って、俳論書としての評価も今ひとつである。一方、近世の俳人は、『二十五箇条』を大変に珍重し、俳論書の中でも本書の引用は甚だ多い。近世俳論史上、もつとも影響力の大きい俳論書の一つである。これがスタンダードであるから、俳論書に「嘘」はつきもの、というくらいの認識でちょうどよいのではないだろうか。芭蕉研究にとって「偽書」であっても、俳論書全体の中では折り込み済みの虚偽ではない。

このように、俳論書には、自らを権威づけようとする志向（正典化への志向）が伏在している。その結果、たとえば伊勢派・雪門・葛飾派・美濃派などといったさまざまなグループが、各々独自の俳論を正典として押し立てるようになり、俳壇全体としてのカノンとなるような俳論書が現れにくい状況があった。芭蕉以後現代に至るまでの三百年間で、『去来抄』のみが俳論のカノンとして生き残った奇跡を思えば、これを特別視しすぎることは危険性も自ずと明らかであろう。そして、答えはまだ出せていないが、俳論というジャンルにとってカノンは本当に必要なのか、という問いを提起して、いったん擱筆する。

ちの こういち 東京大学大学院博士課程。俳諧研究で、論文に「凡菫の連句作法」（日本文学）、「蕪村の類想句」（国語と国文学）など。

紀伊国屋文左衛門と其角 水谷隆之

豪商として有名な紀伊国屋文左衛門は、「千山」と号して其角・祇空・才磨等と俳諧活動を行っていたことが知られている。紀文の実像を伝える資料は意外に少なく、紀州から江戸に蜜柑を運んだり、明暦の大火の際に木曾山の材木を買占めるなどして大儲けした話をはじめ、現在知られる紀文伝の多くは近世後期に創られた虚構である（拙稿「虚像としての紀伊国屋文左衛門」『江戸文学』29、平成十五年）。その一方で、千山の句は生前から多くの俳書に入集しており、祇空の後見のもとに『百子鈴』（宝永六年刊）を自ら編むなど、紀文の旺盛な俳諧活動が想像され、面白い。

なかでも、紀文伝では必ずと言って良いほどよく触れられる其角との交流は興味深い。其角に師事したと伝えられる紀文であるが、実際、『五元集』（其角著・旨原編、延享四年奥書）に収められた其角の句には、

病起 千山ヨリ菊ヲ得て

大母衣のうしろを押や瓶の菊

千山宅とし忘に

割すそや八乙女神楽男より

千山亭新宅雪舟の絵に

隅に巢を鷲こそねらへ五月雨

などがあり、宝永二三年頃のものとして推定される「格枝宛其角書簡」には、「各例之通、千山

方来冊廻雪之引付御発句、雪のもやう宜奉侍入候」とあるなど、千山と其角との親交の事実を確認できる。また、『立志終焉記』（立詠編、宝永元年奥書）の二世立志追悼表六句に、

白魚の色替る物川気色

其角

桜とばかりくねる七文字

千山

とあるのをはじめ、亜提編『三家雋』に収載される『庭の巻』（立詠編、宝永二年刊か）・『青龍歳旦』（祇空編、宝永四年刊）・『鶏筑波』（編者・成立年未詳）にも、千山・其角他で巻かれた連句が見える。其角没後の千山は、『類柑子』（其角稿、祇空等編）の宝永四年跋文に「千山・朝叟、その外連中もよほし、末巻に追悼の句をつらねて」とあるように其角追悼百韻に一座するほか、『斎非時』（格枝・秋色編、宝永五年成）・『俳諧』石などり（秋色編、正徳三年成）等の其角追善句集にも句を寄せている。

もともと、前述の句の成立時期等により両者の関係は宝永に至ってから其角が没する宝永四年までの数年であると推測されること、其角の自撰集に千山の句が見られないこと等から、その交流は期間・実質ともにさほど深いものではなかったと考えられるが、其角との交流に纏わる話題は、その後の紀文伝に虚実相伴って大きく取り上げられてゆくことになる。

山東京伝著『近世奇跡考』（文政元年刊）には、書家佐々木文山が揚屋主人和泉屋半四郎の自慢の屏風に「此所小使無用」と戯書し不興を買ったところ、其角が「花の山」と続

けて一句としたという逸話が載る。『奇跡考』では、この時同席したとされる「富家の主人」を「一説に紀文と云」と指摘する割注があるに過ぎないが、後にこの逸話は紀文伝の一つとして定着する。他にも元禄期に流行した小唄が紀文と其角の遊興の折に作られたものとする等、時を経るにつれ其角に関する逸話は増加している。俳人として名高い其角との交遊譚は、ともすればその大胆で機知に富む商法や遊里での豪遊譚のみに収束してしまいがちな紀文像に厚みをもたせるには恰好の素材であったのだろう。

其角雨乞句が後の紀文伝では必ず触れられるのも、そうした事情によるものと思われる。『五元集』に記載される三囲神社での雨乞句、夕立や田を見めぐりの神ならば

が、本来紀文に関係するものではないにも関わらず、為永春水作『長者永代鑑』（文政六年刊か）、二世春水作『黄金水大尽盃』（第六編、安政四年刊）等による虚構化を経て紀文伝の一つの定型として創作されたものであることは、前掲拙稿にも述べた通りである。

豪商紀文と俳人其角、二人の接点は数々の虚構話を生み出す基盤としてもあり続けた。江戸期を通じての両者の注目度の大きさは、ここにも良く表れている。

みずたに たかゆき 東京大学大学院博士課程。浮世草子研究で論文に「八文字屋興隆期の困水」（国語と国文学）、「北条困水の談理・知識的話題」（日本文学）など。

初懐紙源心作品集

平成十六年一月十八日興行
於 ホテルサンルート東京

源心 「粉雪」

坂本孝子 捌

魁の粉雪やみぬ初懐紙

新宗匠を祝ふ年酒

野の馬はほどよき鞭に走るらん

碧の勾玉紐に揺らしつ

橋桁にスプレーアート月涼し

少女はみんな薄翅蜂

庇護本能朱い唇触れたから

メメント・モリと胸の刻印

改革はイラク派兵で立ち消えか

そろばん塾に御破算の声

登り窯責め焚きの人夜を徹し

小津の映画にしばし親しむ

哲学の道たもとほる花衣

山裾の里鐘はおぼろに

蜃気楼遠き隊商浮かびるて

あとひき豆を歯に鳴らしをり

哀調のバンドネオンに刻む闇

ナイフを握る黒の革ジャン

潮風の荒ぶる中を神の旅

髪梳き流し伽に選ばる

いとけなき顔が意外と手練にて

枝に貫く鴉の早贄

孝子 英子 陽子 蘭石 政治 澄子 石 志 陽 澄 石 志 陽 英 石 志 英 澄 石 志 石

出稼ぎも馴れて都会の月を友

精霊舟押す震災の跡

福寿会びんびんころりが本望で

朝寝の癖はいまだ直らず

楊貴妃の凝脂をすべる飛花落花

歌ひ遊べよ長きふらここ

〃

陽

志

陽

孝

澄

かくし芸てふ手品鮮やか

築百年パリのアパート超人気

裘纏ひモナリザの前

雲道幼なじみの巡り会ひ

恋も後出しじゃんけんで勝つ

男絶ち誰も知らないその理由

荒鷹の目に風の吹き過ぐ

故郷の常念岳にかかる月

主自慢の新蕎麦を打ち

善人であるのも辛い肩の凝り

最終講議補助椅子で聴く

酔ふほどに胡座となりたる花の宴

クレソンの束洗ふせせらぎ

郁

千

郁

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

み

CMでダンスしてゐる縫ひぐるみ

薄型テレビ六十万円

茶漬け食ふ象牙の箸のちんちろりん

受話器を取れば墓地の案内

師の植ゑし花爛漫と咲けよかし

磴を降れば鶯の声

聖霊会舞台に飾る貝あまた

申カッソース二度漬けは駄目

駆け上がる出世街道踏み外し

くだを巻いては倒す熱爛

せり売りの活気いや増すずわい蟹

口説き文句は肥後訛りにて

百均ですべり出したる新所帯

オレオレ詐欺の影写す月

菊人形堂々として内蔵助

栗羊羹でちよつと一服

老いて尚健脚誇りスニーカー

子猫にミルクなめさせる子等

ふるさとは知る人もなく花盛り

夢にたゆたふ春の海原

連衆 鈴木千恵子 倉本路子

村田富美 梅田實 繁原敏女



源心 「寒の椿」

梅田利子 捌

うつむくも仰ぐも寒の椿かな

新雪許す猫の足跡

抜擢の若き社長の凛として

お茶運びするロボットを置く

筑波嶺の月を指せよ四宗匠

蔓をたぐれば恋もするする

暖炉欲し汝の温もりなほ欲しき

先遣隊は挙手の礼して

火星には水を含みし石もあり

今を切り裂き芥川賞

ゲットといふ言葉が好き日本人

足湯に足のずりり並べて

剣菱に君を偲びし花宴

都踊の遠き三味の音

はんなりとりボン結びの春シヨール

祖母から習ふ南無南無の行

怪獣の名前は直ぐに覚えられ

遠野の郷に雪女棲み

お師匠に草履をはかすしなやかさ

般若の面で隠すジエラシー

小指先拭きても残る紅のあと

地産地消に尽くす農業

藤寝椅子樹間の月の在り処

キャンプファイヤー囲みコーラス

母ツチ族父はフツ族留学生

懐旧の情書かす自分史

花大樹臥龍のごとく咲きにけり

上の匂ひの満つる二の丸

利 司

連衆 登坂かりん 佐々木有子

棚町未悠 杉内徒司

源心 「至福かな」

豊田好敏 捌

大根の煮あがる色の至福かな

雪積もる日の浄き文机

スケボーにはしゃぐ児の声響ききて

胸のワッペンMとW

秋の蝶魅入られしごと月に入り

風炉の名残りに誘ひの香

草の実が二人の仲を繋ぎとめ

サラブレッドにまた高値付く

郵便車曲がる坂道走り去る

鐘も涼しき聖母子の像

ルーブルのピラミッド口で待ち合はす

いくつ叶ふか古希すぎの夢

嬰鏢の杖にも白き花ふぶき

弥生の空は甕のぞきなり

キムタクの似顔描きし団扇干す

新撰組は多摩に誕生

たまちゃんはお魚食べてお昼寝し

葉で治すアルツハイマー

懐手してちや石油はやらないぞ

好敏 華蔵 昌 美奈子 一恵 紅舟 昌 奈 蔵 奈 恵 奈 敏 恵 奈 敏 恵 奈 敏 奈

問課に化け盗む暗号

係累のなくて美貌で金持ちで

涙ひと粒こぼす艶然

黒南風も思慕の情けに疼く月

縁台将棋飽きもせず指す

食酒よき江戸指物の三代目

ミヤオリンガルを孫にお土産

花満ちて幸若舞に陶醉し

山川草木なべて陽炎

連衆 山田華藏 中野昌子

鈴木美奈子 山崎一恵 筒井紅舟

源心 「新宗匠の」

篠原達子

捌

新宗匠の一座もうれし初懐紙

櫛の前誓ふ行く末

タンカーは長期航路に出るならん

鷗つきくるマスト船尾に

美術館涼しき月をふり仰ぎ

露台の端に口説長々

純愛は家の相剋のりこえる

修道僧の黒服の裾

道よぎる猫は尻尾をぴんと立て

古びた暖簾なじみ居酒屋

べらんめえこちとら生まれはお城下

暴れん坊の將軍が来る

対局の果てて棋士の背花の降り

もの言ひたげに去りやらぬ蝶

車窓から眺む苗代青々と

故郷持たぬ哀し己が身

パレスチナ銃もて得たる幸ありや

鯨の歌の低く短く

大鍋に水菜油揚ぶち込んで

ことぶき学級みんな先生

突然の夢魔のキッスに若返る

百夜通ひで強き足腰

望の月笛吹川の銀の帯

離れ座敷に瓢ゆらゆら

ゆく秋の間合ひもよろし小津映画

嘯みしめてゐる煎餅の味

ハーレー連らね壮年外科医花峠

蝌蚪生れてをりビーカーの中

連衆 橘文子 井上鶴鳴 松本碧

西田一枝

源心 「初日の出」

近藤守男

捌

頂きの騒ぎだしぬ初日の出

淑気あふるる松の枝々

茶会には碧眼の客混じりゐて

自慢の菓子を苞に戴く

月涼し川波静かレモン色

ジョッキかちんと鳴らす幸せ

糟糠の妻が探偵雇ひ入れ

尊徳像の目元やさしげ

ぼくは今オンラインゲーム没頭症

迷路をたどるジャンゲルの奥

十八年ぶりの優勝虎吼える

拉致問題は棚上げにせず

出航の銅鑼高鳴りて花吹雪

猫とうとうとのどらかな縁

ポーズとるカメラレンズに黄沙降る

ボデーも音も粹なハーレー

護摩を焚き戦なき世を祈るらん

病の癒えて寒餅を搗く

鯛起し七尾の浜は賑はひて

恋に慌てる背の火男

旅回り一座を退いて玉の輿

菊人形はライトアップされ

嫦娥照り荒城の月口遊ぶ

鬼の捨子よ声に皆泣く

芥川賞に輝く十九歳

つつましく生き夢もほどほど

花前線今や盛りのおらが島

バードウオッチング囀りの中

連衆 武井雅子 松原弘子 くのあや

関口靖子 須賀敬子

敬子

弘

雅

や

弘

雅

や

敬

や

弘

男

敬

や

雅

や

靖

男

雅

靖

弘

靖

男

靖

源心 「初旅」

杉山壽子 捌

淑気充つ新宗匠の息づかひ

雪をいたたく初旅の庭

ラグビーの腕をしつかり組みあひて

暗証番号奇数ばかりに

心太突けば何本窓に月

ひやかすだけの朱夏の縁日

ハスラーの密かに持てる隠し玉

札束舐める年上の妻

煙草の火もらってからの色ざんげ

芥川賞平成の風

ダム工事中止の村の鎮まりて

猫悠々と歩く軒下

三味線を鳴らして暮れる花盛り

新車ぞろぞろ豊田市の春

列島の背骨を越えてフェーンくる

座禅をしても耳を掻く僧

英会話駅前教室続かずに

噂が街を散歩してゐる

何処からか切身で届く鯨肉

不倫の恋はレアでいたたく

うはごとくに卑弥呼でありし時の声

豊穡の月領巾をなびかせ

秋涼し児らの瞳の好奇心

猿子の声を聞きとめる藪

その昔爺の埋めたる甕の酒

人材流出日本カラッポ

壽子

健悟

如代

洋子

さえ子

治子

洋

悟

代

え

洋

え

洋

治

洋

悟

〃

代

悟

洋

悟

代

治

え

洋

代

この花をイラクの友に見せまほし

瑞夢に託す蝶の絵手紙

連衆 佛淵健悟 伊勢本如代

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

大島洋子 難波さえ子 加藤治子

治

執筆

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

治

爪の形が似たる隠し児

時速一〇〇君の背中で無重力

食はず嫌ひの鯉濃の膳

さくらんぼ月の光に育ち行く

お祭り騒ぎ妖精の森

曾祖父は何親等と辞書を引き

醉生夢死を生きてただよふ

花霞山に幾つか仏の名

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

湖の面を吹ける柔東風

恭

代

彌

ウ

代

彌

庸

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

彌

花の宴火星の画像着にし

楓合戦の今や酣

靡なる第九条も所在なく

苦虫泣き虫ぞろぞろと出る

砂浴びつ高昌故城遺跡掘り

風邪の葉は嘸まず飲み込む

童顔のまま歳を取り冬帽子

ツアーのバスはしめし合はせて

やんわりとしんなりそしてとろけゆく

くひしん坊の落鰻喰ふ

流木の浜暗皓と望の月

秋の狩場の三つ又の道

大江山酒呑童子と呑み競べ

ホールインワン春昼の夢

花踏みし人の足跡とこしなへ

囀高くおほき盤座

連衆 蒲原志げ子 竹田登代子

古賀一郎 横山わこ 百武冬乃

源心 「ビル抱く」

山口美恵

捌

初茜惜しげもなしにビル抱く

仕事始めと配る新聞

こまやかな切絵の髭を褒められて

横でふふんと鼻鳴らす猫

南瓜畑金の馬車にと変はる月

美恵

鐵男

良子

啓子

利子

木の実降る道叱られてゆく

誘ひ来る隠座頭の真似をして

迷彩服の青年とキス

私がリングピローはつくります

寒角力とる神宮の杜

お立ち会ひ人集まらぬ大道芸

スローライフで暮らすこのごろ

あの花もこの花も良し写真集

羽化せし蝶の葉にすがる状

棒鱈も旨し一献召し上がれ

股から覗く津軽海峡

この辺じや賞総なめのゴンドリエ

マントの裾を翻へしをり

弟のやうなあいつは中也に似

姑獲鳥となつていぢめるは誰

すっぱ抜き情報だけが売れに売れ

去年のままの風鈴の音

摘んでみる月光浴の草苺

病の母へ送る写メール

現代っ子予約なしでは遊べない

からから笑ふ恐竜の骨

花万葉パートナーチェンジサルサ舞ひ

グランドピアノ拭ふ黄塵

注1 結婚式の指輪を載せるクッション

注2 出産のため死んだ女がなるといふ想像上の鳥、または幽霊

忠史

良

啓

史

良

鐵

利

良

啓

利

史

鐵

良

啓

良

史

〃

啓

良

利

鐵

恵

啓

源心 「福耳」

高橋豊美

捌

新年の福耳紅くなりしかな

初鶯の上枝下枝に

パソコンに家族通信打ち込みて

シチューの味を確かめてみる

月映ゆる田の面にさやく梅雨鯨

腰に吊るせる蚊取線香

深草の径通ひ来る貴人よ

鬼にはなれず恋に溺れず

代理母双子育てに四苦八苦

ビデオ片手に附いて行く父

重いのは体重だけと自嘲して

観潮船に萬国旗揺れ

繰り返す島唄の輪に花ふぶき

遍路の笠を少しかしげる

染め抜いた夢一文字の春日向

孫を誘つて挑む漢検

ばしばしと火打ちの火の粉達磨完

やつめ鰻をうまく捌ける

表札に達筆で「萬」太々と

軽口総理又も失言

リメイクの奥様は魔女月上る

きみに触るればマルメロのやう

同衾の寝顔寝化粧すさまじや

あとだしじやんけんいつも顰蹙

ハルウララ負けがこむのが人気にて

豊美

泉子

弘子

蓉子

眞呂

要子

呂

蓉

要

蓉

弘

泉

蓉

弘

要

蓉

要

泉

要

蓉

要

泉

要

呂

要

〃

弘

花の雲地酒の小瓶かたはらに
嬰まどらかに笑ふ野遊
呂 弘

連衆 青木泉子 市野沢弘子

五味蓉子 木村真呂 山本要子

源心 「師の膝に」 島村暁巳 捌

師の膝に猫集ひ来て初懐紙
暁巳

若菜の籠に混じる雑草
佳之子

見はるかす野に動くものかろやかにゆみを
麻子

電車の音にせかされる道
和代

汗しとど撮影隊に月赤し
俊子

臍出し娘と語るすてこ
麻

十九歳「蹴りたい背中」で賞を取り
之

つきだすマイク四方八方
代

大航海歴史は夜につくられる
を

時にあはずは田道間守とぞ
之

たたみいわしさらりと炙るひとり酒
代

万愚節とて定期検診
を

この花に浮かれ出でたり狐憑き
麻

葱の坊主をむしる腕白
俊

祖母の杖叱られた日の遠くなり
代

モノクロ写真村の神々
麻

ナポレオン紅茶に落とす下戸の夜半
之

獵銃持って鬼をやらひぬ
麻

その昔炬燵で手など握られて

美少年待つ白鳥の湖
俊

小型機の巡る前方後円墳
代

木槿散る中からくにの宴
俊

ミルフィーユさくりと月の昇りゆく
之

テレビを消せば鉦叩止む
俊

故郷は丹沢山の空にあり
を

かの子の碑立つ街に住み旧る
麻

回廊を出れば繚乱花篝
已

今しもシテの退る春興
を

連衆 染谷佳之子 青島ゆみを
内田麻子 長崎和代 三木俊子

源心 「樸」 秋山志世子 捌

樸や姑に習ひしこと数多
志世子

初鶯のおほどかな声
丁那

地図を持ち散策コース拡がりて
あかり

写す埴輪のまなこまんまる
香

大屋根の古都に耀ふ夏の霜
了齋

葵祭に若殿の役
佐紀子

カッパルとカッパルの間は5メートル
斎

猫だましにて得たる恋なり
那

山峡の瀬音激しく岩を打ち
り

埋蔵金を掘りて幾歳
佐

暇々にスタインベック読み直し
那

雑魚の飴煮に添へるひと筆
香

花吹雪眠る妖精透明に
り

歩き遍路は風まかせなり
斎

春燈に寄ればくれなる酒舗の標
斎

けふの諍ひしばし忘れる
那

歯には歯をイラク派遣に賛と否と
り

シベリヤ気団近づきし頃
那

思ひ出をふはりとつつみ積る雪
香

蒲団にからむ脚のか細く
り

楯の火は裏返されてまた燃ゆる
斎

開拓村に迫るたそがれ
佐

岬まで今宵の月を見むと出づ
那

枳餅を提げ菩提寺の僧
香

初雁は校舎かすめて遠ざかり
り

聞く人のなきフルートを吹く
斎

アテネへと夢のふくらむ花万朶
世

三輪車追ふ蝶のひらひら
佐

連衆 浅賀丁那 中田あかり

若松香 鈴木了齋 間佐紀子

※訂正とお詫び

前号で文字の間違ひがありました。

ここにお詫びして訂正いたします。

五頁 敦子↓淳子

十一頁 和也↓和弥

八頁 天井↓天上

シベリアの植物

副島久美子

昨年の六月、極東ロシアとシベリアに植物観察の旅をした。

遠い地の果て、憧れのバイカル湖では二泊三日、岬や島に立ち寄りながらのクルーズを楽しみ、折り返してパルチザンスクからラゾ国立自然保護区内のペトロバ島に渡り、世界唯一の一位の純林を訪ねる八日間の旅だった。

新潟からウラジオストク迄一時間二十分、イルクーツク迄は三時間四十分の飛行時間でロシアの国土の広さをまず実感する。

東シベリアの首都イルクーツクは、文化の香り高くインテリジェンスな雰囲気秘めた魅力的な街だった。折しも白楊の柳絮が風に舞い道や広場を真白に埋め尽くしていた。

市の中心を流れるアンガラ河は、バイカル湖の水を受け入れる只一つの河で、流入の河川は三百三十六もあるというのにこれでバランスが保たれている。

バイカル湖畔の集落リストビヤンカからの出航は六月二十四日、小雨まじりの朝だった。最初のバイシーク岬、二番めのカジニ岬共に人氣がなく静かな漁村のたたずまい。

案内の講師は長身、しっかりとした顔付で植物学者のリョーボ女史、採取しながら植物名や特徴など丁寧に説明してくれる。

少し奥に進めばもう其処にはお花畑が広がり、草原一面にシベリア金鳳華がオレンジ色

も鮮やかに咲き乱れていた。

その外紅花一葉草や舞鶴草、黄色の罌粟、黒百合など……楽しい散策で時を過ごした。

夕食後三番めのミーズチャシヤ岬に下船、日没が遅いので八時過ぎというのにやや暗めの黄昏時の感じだ。美しい砂浜がどこ迄も続いていた。根がこんもりと盛り上った欧州赤松の奇観に驚き、吾亦紅、濃紫の岩桔梗など暮れなずむ頃の花々もまた趣あるものだった。翌朝甲板に立てば、船は西岸沿いに北上している。東は果てしなく湖面が広がり水平線で視界が切れる。大海原とも錯覚しそうだが、やがて水平線から日矢が射し昇り太陽が顔を出す。小波を湛え深緑の湖面は忽ちきらきらと銀色に光り出す。

朝日射す湖の煌き燕飛ぶ

船べりを掠め鶴鶴陸目指す

船は昼食用の魚を調達する為に十時迄停泊、数人の男性クルーが釣糸を垂せば直ぐバケツはハリウス（姫鱒の仲間）でいっぱいになる。此処バイカルでは時間の流れが実にゆったりとしていたのだ。

錨を上げた船はオリホン島の中程迄更に北上し無人のパロクチン島に下船、島は夥しい数の鷗が飛び交いコロニーを形成していた。

植物といえば此処もまた珍しいものが沢山、端から端まで歩き廻ってあれもこれも興味

が尽きない。花は蒲公英の様で葉はイネ科に似て細長かったり、兎のキャベツという名の葉が渦を巻いている可愛らしいもの、小振りの黄色のあやめなど時間を忘れる程堪能した。

姫あやめ見たくて岩を下りてゆく

帰国前日はペトロバ島間往復で明け暮れた。島は小高くすっぱりと一位の森で覆われ、年間千人迄の入島宣言で保護されている。

森迄の斜面は、薄紫の樺太花しのぶがすつと群れ立ち薊、玫瑰、息吹虎の尾等とりどりの花が咲き競う中、白い笠状の天花独活がひとときわ高くお花畑にアクセントを付けていた。一位の森に分け入れればあたりは仄暗く、曲がりくねって苔むした幹、人が手を抜けて何人分の太さになろうか瘤だらけの大株等、樹齢八百年からの古木に次々と出合う。ゆっくりと歩を進めて行けば、自ずから自然への畏怖の念が生れ心引き締まる気持になる。人々も神聖な島として崇めていると聞いた。

青しぐれ一位古木に宿る神

森羅万象連句に繋がらないものはないと言われている。旅は自然や人情、史蹟その他諸々連句の種の宝庫だ。私にとって旅と連句は車の両輪、これからも旅を重ねつつ連句の糸を紡ぎ続けて行きたいと願っている。

ひとを見る目

中林あや

・無二の友風

有り体に言えば、わたしはかなりおっちょこちよいいな人間らしい。そのいい加減さのまま現在に至っている。猫養会で唯一わが学生時代を知る山口日恵氏は証言する。陰気臭くておとなしいけれど面白みのない奴だったとか。然るに現在では無二の知己風？であるから面白い。わたし本人は余り以前と変わったというような認識はない。違いは、多少細めで多少かかんであったぐらいなものである。その上、彼女だつて人を見る目があいかわらず無い点は当時とちつとも変っていない。

・直系卑属

ここのとこるベビーシッターに勤しんでいる。大体、赤ん坊なんぞ四六時中一緒にいて楽しいというような種類の動物ではない。しかも信頼するに足らない婆さんをすっかり頼りにしているという、人間を見る目のできていない種族である。最近、わたしの存在自体が、どうも幼い彼女の人生に、悪影響こそあれ、いい結果につながるのの確信がもてない。なにしろ若い活気のあつた頃の子育ての成果があつた二人の息子どもである。推して知るべし。その上赤ん坊にも飽きがくる。嗚呼、いずれこの直系卑属の行く末にはも

のあはれがついて回るのだろう。

・悪路なり筑波みち

ものあはれと言えば、最近、またまた持ち前の軽率が災いして、筑波の道に迷う羽目となった。「簡単よ、やまとことばで言えばいいのだから」とおっしゃるM子さんの口車に乗ってしまったのが間違いのもどだった。わたしに連歌が出来るかつて、やはりM子さんも人を見る目が十分不十分である。

そも、やまとことばとは何ぞやである。これがそんなじよそこらに簡単には落っこちてはいない雅言なのだから。おおみやびよ。

恥をかくのは嫌いだが、勉強も嫌い、それいままから新しいことをわが日々老化に忙しい脳が受け付ける筈が無いではないか。そういうことに気が付いたときには、けなげにももう連歌の渦中にいた。早速発句が来て脇を作れというお達しがまずあり、なかが大和言葉か雅か分らないまま付けてボツ、第三もボツ、つぎは第四である。ようやく二度三度フックスが行き来した後、とつて頂いた句が

脛巾はばきつけ替ええ辿る尾根道

それも、完成品は「つけ替え」ではなく「あらため」である。「はばきあらため」、なんと雅であることよと感激である。「はばき」とは、後世の脚半にあたるのだが、脚半では大

和言葉ではないらしい。古語辞典をひっくり返して偶然見つけた脛巾のなんともいとおしいこと。それから自分の番がくるたびの四苦八苦が続いている。しかしわたし以外の連衆の句の風體の高さ、作意のうるはしさには、かの水無瀬三吟（連歌イコールこれと、その出だしだけはわたしの脳髓にひっかかっていたらしい）をも思ひだされ優雅そのものである。すごい！

しかし、それにつけてもわたしと優雅は縁がない。

・未婚のばば

はじめてといえ、桃井のお宅にお邪魔して、和子先生のもとで連句をご一緒させていただいた時のことを思い出す。連句のことは多少は分っていたので、連歌ほど大変ではなかったけれど、その後何度伺ってもドキドキしたものである。妙チキリンな句もよくとつていただいたなど今更感激する。その和子先生がある日おっしゃった。

「あなたが結婚しているとは思わなかったわ」
どうもわたしには普通の生活感が無いらしい。未婚の婆とでも思っていたのか。

日恵氏、孫、M子さん、和子先生、ひとを見る目のげに面白きことよ、などと思う今日このごろである。

『七部集』のこと

百武冬乃

角川文庫には以前現代俳句作家達の個人句集があつて、若い頃の私にとって教科書のよくなものでした。著名な作家を知りその句に心を寄せて過ぎましたが胸の奥にはいつも芭蕉の姿が消えることなく、私の遍歴は次第に現代作家を離れて芭蕉に向つたのでした。『七部集』を身近く置くようになったのはそれから間もなくのことです。

『七部集』を繰り返し読みながら―それは大層難な読み方でしたでしょうが―決して足の止る処がありません。俳句ではなく、判るとは云い難いけれど妙に面白いもの。それが連句でした。表六句や式目についてはすでに少しばかり学んでいましたがそれはそれとして、一巻の連句とは何と独特の詩風景を繰り広げるものかと感じ入りました。当時私の身辺には連句の「れ」の字もなく、芭蕉はあくまで「俳聖芭蕉」であり続けていました。俳句仲間から身を匿すようにしてひとり連句ばかりを拾ひ読みしたものです。時に目に触れる注釈書、国文学や民俗学の貧しい知識、実生活上の体験、それらが僅かに私の武器と云えました。要するに「無知は力なり」を地で行ったという訳です。

気儘に読んでいるとのっぺらぼうにも見える連なりの中にふと光る句がみつかるように

なりました。念仏講の衆が巡つて来た「親玉」を恭しく押し頂くような気分、存在をアツピールしてくれたその句を吟味すると、その詩情には必ず私の内から呼応する何かがあるのでした。こうして近しくなつた「親玉」は、三句の渡りや一巻の運びを読み解いてゆく手がかりとなつてくれました。同時に、学問的な知識や文学的才能もさることながら、その時代の民族風習、生活史への理解、ごく普通の人情への共感や同情がまず大切なのだと見えて来ました。私の『七部集』は理解のために視野も詩境も広く深く育てよと私を促し、私の読書遍歴は大いに混迷したのでした。

単に情緒が心に響くので、或いは自分の体験との共鳴が嬉しく、またあまりにも普通の表現なのにその場では詩情たつぷりの句となる不思議さに、更に前句を軽い頓智で引き立てたり慰めたりの特徴が面白く、等々「親玉」に惹かれた理由はさまざまです。学究的に読みたい方や式目の見極めが第一という向には響きを買うこと必定でしょうが、ともかくこんな読み方で私は楽しかったなあ。これでは判らない点が多かつた筈ですが、連句は面白いものだと思つて確信してしまいました。

連句愛好者が増え、教室も句座も沢山開かれて今、こんな風にして連句に辿りつく必要はもうないでしょう。大体これでは能率悪いこと甚しい。けれども素朴極まりないこの方法は結局初心者の私にできる唯一のお近

づき法だつたと思います。特にお奨めはしません、一巻全体を理解できなくても共感した処を大切にするのはコツかも知れません。

平均して二年毎に転居する生活にもやがて運命の女神はほほえみ、明雅先生の門下に加えていただいて、ついに私はひとりではなくなりました。めでたしめでたし：ではなく、ひとりで『七部集』に対していた時には思ひも寄らなかつた実作という修練が加わりました。この経験で学んだ最も大切なものは連衆心でした。一巻を創りあげてゆく座の詩的高揚に共鳴し、励まし合い、時に詩心を盡して競い合うこと。それが連衆心であり、連句を連句たらしめる要なのであると。

考えてみれば『七部集』の連句は「七部集の連衆」の連句なのです。私が連衆心のありようをもっと深く会得できる時には、私の『七部集』はこれまでとはまた別の面白さを提供してくれるでしょう。その時ようやく私は『七部集』の連衆に連なっている自分を嬉しく発見できるのではないかしら。

すっかり古びた『七部集』ですが、まだ捨てる訳にはゆかない一冊です。



連句晩学の記

山寺たつみ

私が「連句」という言葉を知ったのは、ある日書店の店頭で『連句恋々』（矢崎藍）を手にした時に始まります。面白そうな付け合が各頁に並んでいました。「転じる」ことを知らない身には少し難しいところもありましたが、世の中にはこんな言葉の曼陀羅のような世界もあるのだと心に残りました。

その後不思議なご縁で「矢崎藍の連句わかるど」に導かれ、「連句KUSARI」で付け合の面白さにハマり、スタッフの皆さんに打越だ、べた付けだどご指導を受けながら夢中になりました。そのうちに、実際にメンバーが集まって句を付け合う「連句の座」があることがわかって来て、そこを覗いてみたくなりました。そこで思いきって平成十三年十一月第十六回国民文化祭連句大会（館林市）に出席してみました。見学のつもりが、伊藤藤彦先生お捌きの半歌仙の座に座ることになりました。これが私の連句事始めで、この時私は七十三歳でありました。

この会場で、ある方に当時長野市に勤務のYさんをご紹介いただき、長野で連句の座を開く希望が生まれました。関心のありそうな方々に北信濃小布施町に集まっていたとき、平成十四年一月Yさんのお捌きで句会を発足させ、半歌仙を巻くことができました。これ

で連句の勉強ができると喜んだのですが、三月の句会でYさんの転勤を知らされ、困ったことになりました。解散か、継続かと悩みましたが「せっかく始めたのだから続けたい」というのが皆さんのご意見でした。しかし指導者が見つかりません。「あなたが勉強してくれば良い」という連衆の無責任な意見に押されて、深川教室に出るほかはないということになりました。

館林で知り合ったMさんにご案内をお願いし、平成十四年四月七日深川教室に伺いました。そこで明雅先生のお捌きで歌仙のご指導をいただきました。ご同座の方々は島村曉巳さん、橋本鷺子さん、矢崎藍さんで親切にお世話をいただきました。句会の後で明雅先生に「猫養会」入会のお許しをいただき、青木秀樹副会長（当時）にご紹介をいただきました。この深川教室の体験によって、私は毎月一回の句会を何とか続ける気力を与えていただきました。

平成十五年の猫養会初懐紙に出席いたしましたところ、明雅先生が会長を退かれたことを知り、事情を知らないままに驚きました。青木新会長のご挨拶の中に「明雅先生は咳がひどいご様子」とありました。さらに驚いてお見舞いの手紙をさしあげましたところ、ご返事をいただきました。お手紙の中に「文音をしませんか」とのお言葉がありました。明雅先生、郁子先生との葉書による歌仙三吟は、

平成十五年二月一日に起首し、四月二十七日満尾いたしました。満尾の時にいただいたお便りの中で先生は「私の連句は自ら世態人情諷交詩と言っている通り、打越からの転じ、前句との付け味を重視する作風」と教えてくださいました。この文音経験は私のかげがえのない財産になりました。晩学の身を憐れんでくださった明雅先生のご厚情は忘れることができません。

私たちの句会「れんく・イン・おぶせ」のメンバーは、八十歳のIさん、七十代のUさん、Kさん、五十代のSさん、三十代のTさん、同じく三十代でポエムを書くというアメリカ人Nさんと私の七名（女性二名、男性五名）の集まりです。作法も式目もよくわからず、ほとんど経験を持たない私が真ん中に入るわけですから、レヴェルの程は推して知るべしであります。でも皆さん何となく楽しく集まり、なんとかして北信濃の地に連句を根付かせたいと大きな夢を描いています。

何時になりにましても試行錯誤の私であります。皆さまのご指導をお願い申しあげます。



